

## 蒙古字韻の篆字母表について

吉池孝一

本文通過分析流傳至今的手抄本蒙古字韻（倫敦抄本）卷首的“字母”和“篆字母”得到以下結論。“篆字母”是無名氏以“原篆字母”（本文假設當時有擺列各種八思巴字篆字母的“原篆字母”表）為材料，按“字母”的順序擺列而做的。還認為這“篆字母”是元朝末年無名氏以浙東本蒙古字韻補朱宗文校訂蒙古字韻的缺損部分而發行補修本蒙古字韻一卷的時候被增入的。此補修本蒙古字韻一卷就是流傳至今的手抄本蒙古字韻（倫敦抄本）的藍本（見吉池 2008c, 2009b）。

### 1. はじめに

ロンドンの大英図書館が所蔵する朱宗文校訂序(序年至大戊申・1308)が付された抄本『蒙古字韻』(これ以後『倫敦抄本』と称する)は存在が確認されている唯一の蒙古字韻である。この『倫敦抄本』の巻首に“字母”と“篆字母”と題されたものがそれぞれ一葉ずつある。“字母”には、漢語の伝統的な三十六字母に基づいた漢字の字母を、パスパ文字の通常の手書体(楷書体とよぶことにする)で表記した表が収められている。“篆字母”のほうには、順番はでたらめであるが、三十六字母に基づいたパスパ字楷書体のそれぞれにパスパ字篆書体を付した表が収められている。小文では、この漢語用の篆字母表がどのように作られたかということ述べる。

結論から言えば、『倫敦抄本』に収められた篆字母表は、現在には伝わらない“原篆字母表”のようなものを材料として、三十六字母用のパスパ字字母表の順番を理解しないまま誤って並べ直して作り上げたものである。

なお、このようにして新たに作られた篆字母表は、漢語音韻学に疎い無名氏によるもので、朱宗文本(序年至大戊申・1308)の後、元末の頃に「補修本」(刊本一卷)が刊行される際に増補されたものとする。

### 2. 字母表と篆字母表

先に述べたように、『倫敦抄本』の巻首には“字母”と題された一葉の後に“篆字母”と題された一葉が付されている。“字母”の一葉には漢語音韻学で声母を表す三十六字母の漢字と共にパスパ字楷書体が収められている。以下に数字を加えて字母表を提示する(表1)。表1では便宜として○記号でパスパ文字の楷書体を表わした。

なお、『倫敦抄本』の書記の方向は、パスパ字モンゴル語やウイグル字モンゴル語と同様に、縦書きで左から右に綴られるのであるが、この字母表はどうしたことか横書きで左から右に綴られる。中村 2008によると、これはチベット文字の配列法の影響を受けたためであるという。もっとも右端の一行は縦に書かれている。この40から46までは漢語で使

用する母音と半母音を表記するためのパスパ文字となっている。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○40
見	溪	群	疑	端	透	定	泥	知	徹	澄	娘	○41
												○42
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	○43
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○44
幫	滂	並	明	非	敷	奉	微	精	清	從	心	○45
												○46
25	26	27	28	29	30	31	32	34	36	38	39	此
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	七
邪	照	穿	床	審	禪	曉	匣	影	喻	來	日	字
							33	35	37			歸
							○	○	○			喻
								同				母
								上				

表 1. 字母表

次に、この字母表と下に掲げた篆字母表（表 2）を見比べると、両者の関係は一目瞭然に判明する。すなわち、楷書体の字母表を下敷きとして、三十六字母の配列順を無視し、1,13,25,2,14,26……と機械的に、縦に左から右に楷書体のパスパ文字を並べ、その下に篆書体のパスパ文字を取めたものが篆字母表ということになる。いまその構成をみると次の通りである。なお、楷書体のパスパ文字を○とし、篆書体のパスパ文字を□とする。数字は、上で提示した楷書体の字母表と対応する。

1○	25○	3○	16○	□	□	□	9○	10○	38○	39○	□	A○
□	□	□	□	6○	□	□	21○	□	□	□	43○	A□
□	2○	15○	28○	□	19○	20○	□	22○	□	□	□	
□	□	□	□	18○	□	□	34○	□	12○	40○	□	
13○	14○	27○	5○	□	31○	32○	□	36○	□	□	44○	
□	□	□	17○	30○	□	□	35○	□	24○	41○	45○	
□	26○	4○	□	□	8○	33○	□	□	□	□	□	
□	□	□	28○	7○	□	□	□	□	□	42○	□	

表 2. 篆字母表

この表には楷書体の字母表にある 37, 11, 23 および 46 に対応する字母が欠けている。このことも問題であるが、より大きな問題は、右端の A○すなわち𠄎と、その篆書体 A□すな

わち𑖀である。何が問題となるか以下に示す。

元の盛熙明著『法書考』と明初の陶宗儀著『書史會要』（1376年）および民国九年（1920）の『新元史』には同一の伝承に基づくパスパ文字の字母表が掲載されており<sup>1</sup>、これは不特定の言語を表記するために用意された“原字母表”とみなされている。いま『書史會要』（洪武刊本）によって“原字母表”をみると、𑖀というパスパ文字があり“惡”と漢字による音注がほどこされている。これとは字形を異にするものを掲載する資料もある。最近公開されたハラホトから出土したパスパ字文書（No. 086）も“原字母表”に近いものであり、そこには同一の字母が𑖀としてでてくる<sup>2</sup>。𑖀と𑖀のいずれが正規の字形であるのか、にわかには決めがたいが、『倫敦抄本』篆字母表の A〇すなわち𑖀は、𑖀/𑖀に相当するとみて大過ないであろう。このことは、照那斯圖 1980 で既に指摘されている。照那斯圖 1980 は、印章や碑額や『倫敦抄本』を資料として、パスパ文字の篆書体を収集し整理したものであるが、『倫敦抄本』の A〇すなわち篆書体の𑖀を、楷書体𑖀の下に収めている。これより照那斯圖 1980 が『倫敦抄本』の A〇𑖀を“原字母表”の𑖀と見なしていたことがわかる。これは卓見であるが、A〇𑖀すなわち𑖀が、なぜ『倫敦抄本』の篆字母表の中にあるのかということには言及しない。A〇𑖀すなわち𑖀は、モンゴル語文、漢文、ウイグル語文、チベット語文、サンスクリット語文の何れにおいても使用されることは無い。知られている如何なる言語の表記にも使用されないからには、この文字が、なぜ漢語用の字母表に現われるのかということについて、何かしらの説明が必要となろう。

### 3. 原篆字母表の存在

A〇𑖀すなわち𑖀は“原字母表”に収められていたものであるが、この字母は漢字音の表記とは無関係である。無関係であるにもかかわらず、漢字音を表記する『倫敦抄本』の篆字母表に現に出てくる。この不可解な出来事は、次に述べるように、“原篆字母表”の存在を想定しそれを利用したと考えることによって説明することができる。

元の盛熙明著『法書考』と明初の陶宗儀著『書史會要』（1376年）および民国九年（1920）の『新元史』には同一の伝承に基づくパスパ文字の字母表が掲載されている。これは不特定の言語を表記するために用意されたもので、パスパ文字が作られた当時の“原字母表”（パスパ文字は楷書体）とみなされているということについては先に触れた。この“原字母表”の楷書体パスパ文字のそれぞれに、篆書体のパスパ文字を付した表が、別に作られていたと想定し、この表を“原篆字母表”と呼ぶことにする。ただし、“原篆字母表”に収められた字母の種類が“原字母表”と同一であったかどうかはわからない。或いは漢語用の字母が幾つか増補されていたかもしれない。

<sup>1</sup> 『新元史』の表は『書史會要』の系統のもので、字形は一層崩れており、新たな情報はない。『法書考』には四部叢刊続編本と四庫全書本があるけれども、一部の字形を除き、概して四部叢刊続編本のほうが整っている。『書史會要』には洪武刊本、崇禎刊本、四庫全書本などがあるけれども、洪武刊本がもっともよい。『法書考』『書史會要』の諸版を比べると洪武刊本の『書史會要』が最良である。

<sup>2</sup> 吉田順一・チメドルジ 2008 の 339 頁参照。

さて、“原篆字母表”の存在を前提として、先の不可解な篆字母表が作られた手順を想定すると次のようになる。ある人物の手元には、パスパ字漢語の三十六字母表（楷書体。チベット文字のように横書きで左から右に読み進む）と“原篆字母表”の二種があったはずである。その人物は、パスパ字漢語の楷書体の三十六字母表を見て、漢語用のパスパ字篆書体を集めた三十六字母表のようなものを作ることができたならば便利であろうと考えた。そこで、“原篆字母表”の中から、楷書体パスパ文字とそれに対応する篆書体パスパ文字を抜き出して、三十六字母表に倣って並べ直し新たな篆字母表を作ることにした。

ところが困ったことに、この人物には漢語音韻学の知識は無かったようである。先に述べたように三十六字母表は横に読むと伝統的な三十六字母の順序となるのであるが、そのことが理解できず、三十六字母表を機械的に縦に読みながら楷書体と篆書体のパスパ文字を並べてしまったので、出来上がったものは支離滅裂なものとなってしまった。そして、三十六字母表の最後の“○46”まで作業を進めたときに、あろうことか、“原篆字母表”から誤ってA○すなわちを選び出し、これを新たな篆字母表に組み込んでしまうという不手際まで起こしてしまったのである。

そんな不手際が実際に起こるのであろうかと不審に思われる向きもあろうが、表1の字母表の最後の一行をご覧ください。この一行の40から46は、母音字と半母音字を並べた個所であるが、『法書考』や『書史會要』の“原字母表”を見ると、A○すなわちは、ちょうど母音字と半母音字の間に位置している。“原篆字母表”の順番も“原字母表”とほぼ同様であったはずであるから、母音字と半母音字の一つを抜き出す際に、誤って近くにあったA○すなわちを抜き出すという不手際が起こったとしても、それほど不自然なことではない。

#### 4. 篆字母表の字形について

『倫敦抄本』に収められた篆字母表が、現在には伝わらない“原篆字母表”中の楷書体パスパ文字と篆書体パスパ文字を材料として、漢語三十六字母用のパスパ字字母表（チベット文字のように横書きで左から右に読み進む）の順番を理解しないまま誤って参照し、誤った順番のままに並べ直して作り上げたものであるとすると、これまで理解し難かった幾つかの問題を解くことができる。篆字母表中の楷書体のパスパ文字に、『倫敦抄本』の他の部分には見られない特徴がある。一つはパスパ文字のéの字形である。篆字母表はこれをすなわちとする。éの字形としてはこれが正しいのであるが、どうしたことか『倫敦抄本』の他の部分では全てもしくはもしくはというように下の線が閉じた字形となり、一つの例外も無い。いま一つはkの字形である。篆字母表はこれをとするのであるが、他の部分は全てもしくはとする。

篆字母表は、このように他の部分とは異なる字形を含んでおり、字形の面でやや異質な印象を与えるわけであるが、これを“原篆字母表”中の楷書体パスパ文字を引き写したためその字形を留めていると考えたならば了解できるのではなかろうか。

## 5. おわりに

『倫敦抄本』には朱宗文による校訂の序(序年至大戊申・1308)が付されている。この書が朱宗文の増補校訂に係るものであるからには「原本蒙古字韻」なるものがあつたはずであり、どのような変遷を経て「原本蒙古字韻」から『倫敦抄本』となったかということが問題となる。

そこで、『倫敦抄本』にある篆字母表はいつ蒙古字韻に付されたのかという問題が起こる。この表は、いま見てきたように、漢語の伝統的な三十六字母からみると、その配列順はでたらめである。しかも、漢語とは無関係な字母を誤り収めている。さらに、パスパ文字の字形をみても他の部分とは異質なものを含んでいる。このような不完全な篆字母表が「原本蒙古字韻」に収められていたのであろうか。そしてその後、漢語音韻學に通じていたはずの朱宗文がそれを目にし、何の訂正も加えずに刊行したのであろうか。このような疑問は私ならずとも、どなたでもお持ちになることであろう。個別の出来事としてはどの様なことでも起こり得るから、篆字母表は「原本蒙古字韻」に既にあつたのだとしても不可能ではないが、蓋然性という点から言えば、朱宗文以降に増補されたと見たほうが自然であろう。そこで、その増補の時期を元末と想定したいのである。

吉池 2008d, 2009b で「原本蒙古字韻」から『倫敦抄本』までの沿革の模式図を公表したさい、朱宗文が校訂増補して発刊した「朱宗文本」(刊本一卷)の後、元末に「補修本」(刊本一卷)なるものが刊行されたことを述べ、その経緯を次のように略説した。すなわち、朱宗文より五十年程経った元代末期の頃には、「朱宗文本」(刊本一卷)はずでに珍しい書となっていた。当時、ある人物がその書を入手したのだが、あちらこちらに欠落があつた。欠落はあつたけれども、その書の価値を認め、欠落した部分を手持ちの「浙東本」を用いて補って「補修本」(刊本一卷)を作り刊行した。補修用に利用された「浙東本」は、朱宗文による校訂や増補を経ていなかったため、当然のことながら、補修部分は朱宗文の校訂の通りには直っておらず、義注付きの漢字もなかった<sup>3</sup>。

小文では、元末の「補修本」(刊本一卷)の刊行に際して篆字母表も増補したと想定するのである。

---

<sup>3</sup> 吉池 2008c。現存する『倫敦抄本』(二卷)の巻首には朱宗文による本文の校訂をまとめた“校正字様”と題された葉が付されているのであるが、本文を精査するとその“校正字様”の通りに校訂されていない部分がある。校訂されていない部分は「浙東本」の誤とされるものであり、「浙東本」の誤を含む前後には他と異なる特徴がある。その特徴の一つは、義注が付された漢字が無いということである。これによって、「浙東本」の誤を含み義注が付された漢字が無い部分即ち“下四 a～下五 b および下二十一葉 b 以降の大半”は「浙東本」であると結論することができる。このように、欠落が生じた「朱宗文本」を「浙東本」で補修し刊行したものを「補修本」と称するのである。これ以後述べるように、この「補修本」(刊本一卷)に基づき「四庫採進本」(抄本二卷)が作られ、その「四庫採進本」(抄本二卷)を抄写したものが『倫敦抄本』(二卷)ということになる。

<参考文献(発行年順)>

- 関西大学東西学術研究所 1956. 『影印大英博物館蔵舊鈔本蒙古字韻』 大阪：関西大学。
- 羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』 北京：科学出版社。
- 尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』 第 8 集, 162-180 頁。
- 鄭再發 1965. 『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』 台北：国立台湾大学文学院。
- 橋本萬太郎 1971. 「ブリテン博物館蔵旧抄本蒙古字韻雜記」, 『AA 研通信』 14, 1-4 頁。
- 兪昌均 1973. 『較定蒙古韻略』 台北：成文出版社。
- 照那斯圖 1980. 「八思巴字篆体字母研究」, 『中国語文』 1980 年第 4 期, 307-309, 269 頁。
- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』 北京：民族出版社。
- 黄愛平 1989. 『四庫全書纂修研究』 北京：中国人民大学出版社。
- 遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『中国語学研究 開篇』 第 7 号, 25-44 頁。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』 1992 年第 3 期, 9-16 頁。
- 吉池孝一 1993a. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 72 号, 17-31 頁。
- 吉池孝一 1993b. 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」, 『中国語学』(日本中国語学会) 第 240 号, 31-40 頁。
- 中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覧』 富山大学人文学部中国語学研究室内パスパ字研究会発行。
- 遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大学) 第 35 号, 117-126 頁。
- 吉池孝一 1995. 「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 78 号, 197-208 頁。
- 吉池孝一 1997. 「中世蒙古語の漢字音訳と「蒙古字韻総括変化之図」」, 『日本モンゴル学会紀要』 第 27 号 (1996), 77-90 頁。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻会挙要及相關韻書』 北京：中華書局。
- 中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』 第 9 号, 1-4 頁。
- 吉田順一・チメドルジ 2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』 東京：雄山閣。
- 韓国学中央研究院研究處編集 2008. 『蒙古字韻』(影印本。解題：鄭光) 韓国城南市：韓国学中央研究院。
- 吉池孝一 2008a. 「蒙古字韻の改装などについて」, 『KOTONOHA』 第 65 号, 11-12 頁。
- 吉池孝一 2008b. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』 第 70 号, 7-16 頁。
- 吉池孝一 2008c. 「蒙古字韻の補修について」, 『KOTONOHA』 第 71 号, 1-9 頁。
- 吉池孝一 2008d. 「原本蒙古字韻再構の試み」, 『International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pa script』 韓国学中央研究院 (2008 年 11 月), 141-155 頁。
- 中村雅之 2008. 「パスパ文字の字母表について」, 『KOTONOHA』 第 73 号, 1-3 頁。
- 吉池孝一 2009a. 「蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期」, 『KOTONOHA』 第 74 号, 41-43 頁。
- 吉池孝一 2009b. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』 第 81 号, 10-17 頁。